

目的 プレザーの製作設計に於いて、布地の選定基本としての条件限度を知る必要を感じた。そこでプレザーの袖付について見映えをよくするために、袖山の深さ、袖巾の渡り袖山の形、いせこみ量等が、物性の変化といかに対応出来るか、その可能限度を実験研究した。

方法 先に袖付の見映えについての実験で、袖山の高さ、いせ量の変化等の25種類のプレザーを製作し、学生52名による評価判定の結果、一番良いとされたパターンを本実験のパターンに選び、資料布はプレザーとして市場でよく消化されている10種類を選定した。製作は量産工程と同じ条件による裁断、縫製をし、着装検査用ボディに着装させ、衣服製作経験者5名により、出来映えについて評価判定を行い、袖のハング、袖山のいせの美しさ並びに総合評価を行い布地との相関関係について研究した。

結果 ハング、袖山のいせ量の両者が良いと評価されたのは、資料№2でレーヨン100%の綾織物であった。両者を合せた総合評価では、資料№10でハング評価も上位にあり、糸使いはトリアセテート70%、ポリエステル30%の混紡による平織であった。資料№2、№10のいずれもカンチレバー法による曲げかたさの数値が低い値を示していた。